

中村拓磨

ジョージア工科大学, 航空宇宙工学科

2017年4月 留学報告書

インターンとして働くことになった。5月～8月の13週間ほどワシントン州のシアトルに滞在予定である。今回はインターンについてや、僕がインターンシップを探した過程について書いてみようと思う。本文の中で逐一言及しているが、この文章の内容は基本的にエンジニアリングのインターンについてである。サイエンスやその他の分野の人のインターンは随分と事情が違うことも承知なので、そのつもりで読んでもらえればと思う。

インターンについて

アメリカにおけるインターンは、基本的には期間が短いが普通の雇用である。ただ、アメリカの雇用は普通と言っても日本のように終身雇用という雰囲気はないので随意雇用である。Full-Timeとは言えど“Hire at Will”, “Fire at Will”と言われるように理由なく解雇できるのが一般的。そんなFull-Timeの仕事を“普通の雇用”と呼ぶことにする。なおアメリカ人の友人曰く、週に何時間働くかの表現にFull-Time, Part-Timeといった単語を使うことがあるが、一般的にFull-Timeといえれば契約の終わりが無い雇用という意味で使われる。少なくともこの記事ではその意味で使う。(とはいえどインターンも週に40時間働くのももう一つの意味でも“Full-Time”である。)

一般的にインターンは夏の間に行われる(12-14週間)が、春や秋セメスターの間に行われる、あるいは通年で行われることもある。短期間の雇用なので関わるプロジェクトは短期間で完結するものが多い。学生ビザ(F1)で来ている留学生はCPTやOPTといった労働許可を申請する必要がある。基本的にはインターン先からもらったオファーレターさえあればすんなり許可が出る。OPTでインターンする場合はCPTよりも申請に時間がかかるらしい。僕はCPTでのインターン。

先ほど“普通の雇用”と言った通り、インターンの仕事には給料が出る。プロフィットシェアや他のベネフィットがもらえる場合も多い。給料の額もインターン時点での学位相当はもらえるものだと考えている。(博士課程の学生がインターンするなら修士卒相当、修士の学生なら学士卒相当といった具合に。)僕の知る限り、エンジニアリングの博士課程の学生なら月\$5,000(月55万円ぐらい?)以上

はもらえるが、これは修士卒の学生と同等程度ではないだろうか。インターンの給料は調べると山ほどでてくるが、こちらの記事

(<http://www.cnbc.com/2016/12/02/how-much-interns-will-make-at-major-companies-in-2017.html>)で例えばFacebookは給料\$8,000/月と家賃\$1,000/月と書いてある。ここで紹介されている企業は比較的高い方だと思うが日系企業でも\$7,000/月もらえるところも知っている。それでも学位取得後はもっと上がると思う。

なぜインターンに行くかの理由は色々あることだろう。インターンの多くはFull-Timeの採用につながってる。就職したい企業のインターンに行き、良い業績を出してFull-Time職にありつくことを目標にする人もいるだろう。また、インターン中の給料は大学院生の給料よりかなりいい。インターン中に貯金して残りの期間の学費や生活費を払う人もいる。役に立つスキルを身に着けたい、レジュメに職歴を書きたい、大学でできない研究がしたいといったモチベーションの人もいるだろう。

僕の周りを見る限り卒業直前、あるいは卒業1,2年前にインターンするケースが多い気がする。理由の1つは先ほど言った通り就職に直結しているからだろうか。インターンは既に就活であり、インターンを得ることで事実上就活が終わる場合もよくある。2つ目はスキルの問題だろうか。卒業の近い学生の方が即戦力になる可能性が高く、企業側が採りたかったりするのでは？あと卒業の迫った学生の方がそのまま就職してくれる可能性もあるし企業には魅力だろう。インターンは学生にとっても就活の一環だが、企業にとっても採用の一環なのだ。

最後に、言うまでもないかもしれないが採用の過程は千差万別である。教授のコネでサクッと決まる場合。リクルーターが大学のキャンパスに来て面接する場合、オンラインで応募して面接をする場合。面接に関しても、電話で面接する場合、企業に出向く場合、技術的な質問の場合、過去の研究について突っ込まれる場合、ホワイトボードにコードを書く場合、など色々だ。僕は6社に出したが全部オンラインでの申し込み（どの会社にもコネらしいコネがなかったので他に手段がなかったのだが。）だった。ふるいにかけるために面接するケースもあれば形式的にやっているだけのこともあるらしい。

以上がインターンのまとめといったところか。面接の内容に興味がある人はGlassdoorやCareerCupなどを調べてみると面白いかもしれない。これより下は僕のカッコつけた愚痴である。以下有益な情報はないかもしれないがよければ読んでほしい。

If(夢 && 金){ 生; }

僕はなぜインターンに行くのか。消極的でない風に述べれば、自分の能力を試してみたかったからだ。優秀な人間のいそうな環境に身をおいて頑張ってみたかった。あと、今の研究室の方針に疑問を持ったのもある。うちの研究室はかなり古いシステムをずっと使っているし、研究のテーマも10年ぐらい前から似た感じで、他のところはどういうシステムでドローンを飛ばして、どういう研究をしているのか見てみたかった。というわけでドローンをやってみて優秀そうな人がいると思った企業幾つかにインターンを申し込んでみた。自分の能力を試してみたかった。

だがそんなのは建設的っぽい理由に仕立てただけで、あまり本心を表現している感じではない。本心は「自分の力がどれぐらいあるか試したい」などという挑戦的で前向きな感じよりは「あれ、僕本当にアメリカで食っていけるんですかね、この先??」みたいな不安な感じだ。不安故に、いざ卒業して路頭に迷う前に自分が本当にアメリカで生きていけるのかを試してみたかった。

こういう発想に至ったのもお金に関しての疲弊が多すぎたからな気がする。前回のレポートにも書いたが、引き続きラボの経済状況はよくなかった。今季の給料が出るか出ないかも学費支払い締切りの数日前まで分からない、というのがザラ。いくらもらえるかも、いつまでももらえるかも、誰が払ってくれるのかも不明。そんな訳だから次の仕事内容も不明。すなわち今後の研究の方針も不明。そして実際給料が出なかった期間も、少なかった期間も経験した。「給料が出なくても貯金で生活すればいいのでは？」と思う人もいるだろうが、実はそんなに簡単な額ではない。給料が払われるということはRAまたはTAとして雇われるということなわけだが、これは同時に授業料免除を意味する。そして、授業料は留学生の場合1セメスターで\$15,000ほどかかる。つまり、雇われれば4ヶ月で+\$8,000程度だが、雇われないと-\$15,000。たった4ヶ月で\$23,000（240万円以上！）も支出に差が生まれるわけだ。そして、留学生は授業に登録しないとVISAを維持できないので払えないのなら実質の帰国である。そんな決断が締切りの数日前、という生活が1年以上続いた。うんざりであった。（去年の終わり頃にNASAの予算がついて一応今はこのうんざりする生活も一段落したはずである。）

僕は永住権が手に入るまでアメリカで働いて、永住権がつけばSpaceXなどの航空宇宙系のところで働きたいと考えていた、が「あれ？そもそも、それまでアメリカ

に居れる前提が怪しくないか？」と思い始めていた。先行きの怪しい学生生活。永住権／市民権がないと基本的に門前払いの航空宇宙系。おまけにうちの研究室を卒業して、アメリカで企業に就職した留学生はゼロだ。ひとまずどこかのインターンがもらえるかももらえないかで、この先の人生ゲームの難易度を計ろうとしたわけだ。もしもインターンがもらえてなかったら日本への就職も考え始めていたことだろう。

アメリカの生活に満足しているし、僕なりにアメリカンドリームを生きているつもりだが、夢しかなければ死ぬしかない。僕は「若い時の苦労は買ってでもしろ」論に比較的賛成の人間だが、時には苦労を売って錬金する必要もある。生きていくには金も夢も要る。ひとまずインターンが決まって、アメリカ社会でもそれなりに評価されるのかな、って思ったりしている。金も夢もしばらくは続きそうだ。